

その場に応じた読み方だけを

よく尋ねられることですが、「音訓はどう指導するか」ということです。一つの漢字にいくつもの音訓がある。これを皆教えるのかどうか、ということなのです。

わたしの漢字教育では、「一つの漢字にいくつもの音訓(つまり、読み方)がある」とは考えないのです。言葉を基にして、その言葉を表わす文字としての漢字を考えるのです。

具体的に言いましょう。“うし”という言葉に対して“牛”という漢字を教えるのです。だから、“牛”という漢字は“うし”と読めればよいので、他のことは考える必要はない、という考えです。

“ぎゅうにゅう”という言葉に対して“牛乳”という漢字を教えます。だから、この字を見れば“ぎゅうにゅう”と読めればよいのです。

牛と牛乳と、どちらを先に教えるか。それは、その実際に即して教えるのですから、“牛”が先になることもあれば、“牛乳”が先になることもあってよいのです。

その実物について、その実物を表わす漢字を教えるのですから、どちらから教えようと、幼児にとっては、大した問題ではないのです。牛のほうが牛乳よりもやさしいように思われがちですが、“牛”の実物

を見ない幼児にとっては、“牛”は“牛乳”よりも決してやさしいとは言えません。たびたび言うように、幼児には、目に見えないものを想像することはできませんし、頭に描けないものを表わす字など、幼児は関心を持つことができないのです。

漢字の使命は、それが何を意味するかを人に伝えることにあります。“牛”という字を見たら、即座に、おとなならだれでも知っている動物の牛が思い浮かべられれば、それでよいのです。極端に言えば、“うし”でも、“ぎゅう”でも、読み方はどうでもよいのです。

この場合、“牛の乳”と読む字だという説明をせず、そのものずばり、牛乳という実体に即して“牛乳”と教えて下さい。“牛”だけ見たのでは、何の反応も起こらないようでよいのです。

“牛乳”の“牛”が“うし”であることを教えるのは、現実の牛(と言っても絵でもよいのです)について、それを表わす“牛”という字を覚え、しかも、幼児が「この“牛”は“牛乳”の上の字と同じではないか」という発見、もしくは疑問を発した時です。

それまでは、“牛”と“牛乳”とは、関係なく教えるのが、わたしどもの基本的な考え方です。幼児は、牛と牛乳との実際的な関係は知らないのですから、初めからこれを関係づけて教えることは無用であり、無理でもあるのです。